



謎の超笑力をもつ大魔王が、あなたに贈る不思議なムダ話

発行：トラベル・ミトラ・ジャパン

ぼん子画

(530-0041) 大阪市北区天神橋 1-18-25 第3 マツイ・ビル 201 TEL : 06-6354-3011

お笑いエッセイのメール発信をご希望の方は、ご連絡下さい。(E-mail : daimao@travelmitra.jp)

## 「闘い方、生き方」

ロシアのウクライナ侵略の新聞記事を読んで、呆れかえった。

「人類の敵は私たちの民族関係にウソを投げ込み、紛争へ発展させる」

(侵略の火種とウソを投げ込んだのは、ロシアだろう！)

「国家は、武力を行使する法的権利を持つ。法に反する国民を従わせ、他国を脅威とみなせば強制的に排除する」

(反戦を唱える国民を排除する権利は、国家にない！)

「非常に強い国になったロシアを弱体化させようと友愛の民を利用するとは、なんと卑劣なことか」

(友愛の隣人ウクライナを侵略するとは、なんと卑劣なことか！)

朝日新聞の記事「対立する国家 巻き込まれる信仰」(2022-03-27 論説委員・郷富佐子) より。

これはロシアの政治家の発言ではない。驚いたことに、キリスト者、ロシア正教会の最高指導者キリル総主教の説教である。ウクライナの宗教地図は、大きく三つに分かれる。①ロシア正教会から別れたウクライナ正教会②東方正教会③ウクライナ・カトリック教会である。

ウクライナ正教会は、もともとロシア正教会の管轄下にあったが独立したので、キリル総主教は頭にきて敵視していたのかもしれない。さすがに、ローマ教皇庁(バチカン)はこの発言に落胆した。

「侵略に宗教的なお墨付きを与えたも同然だ」と。

キリル総主教・権威主義者の話をこれ以上すると、わが輩のお笑いエッセイが汚れるので本題に移ることにする。一人の名も無いキリスト者の話をしよう。

三月二十四日、一人の女性がコルカタで肺炎(コロナ・ウイルス)のため亡くなった。彼女はパナソニックや企画会社に勤務、2004年(57歳)に早期退職、2005年にマザー・テレサの「死を待つ人の家」でボランティア活動を始めた。

その頃にカルカッタで出会った智恵子さんは、彼女から「私はここで骨をうずめるつもりです」という確信に満ちたことばを聞いていた。

彼女の名前は智恵子さんから聞いていたが、2015年頃から近くなった。ある日わが輩の友人(印刷会社の社長)から、「後輩で、インドでボランティアしているのがある」と聞いた。それが彼女であった。

同志社高校バスケット部の一年後輩であった。「顔は思い出さないが、ちょこまか良く動く子やった」と、彼女の機敏な行動のことを良く記憶していた。

彼女はコルカタで写真を撮られること、自分の名前が表に出ることを嫌がっていた。おそらく、いわゆる“ボランティア浪人”ではなく、生き方、あるいは死に方、いや再生の問題として、残りの人生を考えていたのではないだろうか。

彼女のこころの遍歴を知る由もないが、唯一『道標』（大阪万福寺発行の寺報 2018 夏季号）から少し垣間見ることができる。実は、気乗りのしない彼女を説得して、この寄稿を頼み込んだ。

年間特集『『看取る』ということ、『看取られる』ということ』の第三回「ひとの生と死を見つめることは、自分の生き方を見つめなおすこと」のテーマで書いてもらった。

京都の商家に生まれた彼女は、小学一年生のときに母を亡くした。

「商家に嫁ぎ、商いの手伝いをしつつ、住込み人と家族の賄いをこなし、夕膳には父にお造り等の一品を添え、自分はいつも残り物を食べる、そんな昔気質の母」であった。

母は、父が胆石で入院中、自分の乳癌の進行を隠して商いを守った。父が退院するときに、はじめて自らの病を告白したが、その時はすでに遅かった。

幼かった彼女は、たびたび母方の祖母の家にいき「しなびた乳をまさぐりながら」眠った。祖母が亡くなり、病気がちの父も肺癌に冒された。

「わしなあー、前世で何か悪いことしたんやろか、病氣ばかりして、ライオンの会でもいつも一人で、寂しかったわ・・・」

父の最期の本音であった。苦しみのあまり、マスクを自分で外し「殺せえ・・・！！」と叫んだ。

彼女をインドに突き動かしたのは、母・祖母・父の臨終であった。

幼いころ仏壇の線香の香りで目覚めたが、彼女を「死を待つ人の家」へと目覚めさせたのは、あるシスターのことばであった。それが導引となり「マザーのとてつもない愛と行動力に魅せられて」インドでの生き方を選んだ。

父の十三回忌法要のあと、「私は、若くして逝った母と、再婚もせずに子供三人を育ててくれた父のもとに生を受けたことを誇りに思っています」と、親類縁者に礼を述べ、マザー・テレサの施設で「いのちの限り人のために生きて、両親に恩返ししたい」と告白した。

「死を待つ人の家」(注)は、フォト・ジャーナリスト沖守弘の訳語であるが、原義は「ニルマラ・フリダヤ」で、汚れのない心の意味である。かつては七割が亡くなったが、今や三割に減少している。それでも運ばれてくる人の悲惨さは変わらない。死を看取るのではなく、「生」へと送り出すのが彼女の使命となった。

二〇一八年十一月シャンティニケータン大学に招待されたとき、彼女への託送品を届けたことがあった。そのとき、今の人生を選んだ理由を聞いた。すべてのものを捨てて「どろどろしたものから離れるため」と、聞いた記憶がある。なにか重いしがらみがあったのか、それ以上は聞かなかった。

重い話ばかりではない。二〇一九年六月、一時帰国したとき、食事を共にした。大学生のとき「京都の御曹司と恋愛していたんですってね」と聞いたところ、「なんで、そんなことを知っているの？ だれも知らないのに」と相好を崩した。まるで女子大生のようににはにかんだ。

彼女は「洗礼を受けてもいず」、正式なキリスト者ではないが、すでにキリスト者であるにちがいない。でも、信仰という言葉では片づけられない。両親に「よく生きたね」と迎えてもらいたい、と望んでいたが、わが輩は「立派に生きた。うらやましい」と惜しみなく賞賛したい。

(注)「死を待つ人の家」は、ベナレスの臨終を待つ人の家「ムクティ・バーワン・解脱の家」をヒントにしている。思想的にも異なるので、現在では「再生の家」(Revive home)が適訳だと思える。